

押入と抽斗^{ひき だし}

西村 秀雄（国際文化学科助教授）

実家の屋号は「インキョ」という。本当は別の正式な（？）屋号があるのだが、そちらは誰も使わない。庄屋だった先祖が隠居したことによるそう。

だから当然、家紋のついた大きな蔵がある。鉄格子をはめ込んだ重い引き戸の向こうはまったくの別世界。鎮座しているのは数百年の時を越えて存在してきた品々。ひんやりとした空気が頬を染め抜く。

図書館は実家の蔵のようなものだと思っていた。地元国立大学の学部学生だった8年間は、特にそう思いこんでいた。他の学生よりもはるかに図書館を利用していたにもかかわらず。

アメリカ式の教育システムを誇る大学の大学院へ進んで、すべてが変わった。もちろん貴重な資料を含めて蔵書数は膨大。しかしそれらは死蔵されているのではない。本は書棚で利用者を今か今かと待ちかまえている。支援体制も充実。優秀なライブラリアンは生き生きとした表情で利用者をアシストしている。職員というより、まるで教えることが大好きな先生のように。そして何よりも、図書館全体が研究・学習のための有能な秘書といった感じである。

根本的に違うのだ。発想が。

知識を収めるのはあたり前。問題はどうかしたら図書館を積極的に利用してもらい、何かを生み出す手助けになれるか。だから図書館員は産婆さんのようなもの。

若い読者が土蔵になじみが薄ければ、押入で説明しよう。押入にむやみに物を詰め込んでも、どこに何を収納したかわからなくなってしまふことは良くあること。場合によっては詰め込みすぎで戸が壊れてしまふかもしれない。それよりも、本当に大切なことを机の抽斗から「引き出す」能力を伸ばすことの方が、長い目で見た場合にはずっと大切なのではないだろうか。特に旧来の価値が完全に崩壊し、自分の心で正しいもの、正しい未来を見抜くことを求められている現代においては。意外に思われるかもしれないが、激動するこの時代は、実はとても大きなチャンスを用意している。そのチャンスをつかみ、そして形あるものにするために、抽斗のような図書館は利用を待っている。

educate(教育する)という言葉は、ラテン語の educare に由来する。この言葉は本来「引き出す」という意味である。教育の基本は「教え込む」ものではないというわけだ。これはとても大切なこと。新しい発想の図書館と、教育の原点はまさに一致している。

暇ができたせいか、自分の発想がこのごろずいぶん変わったことに気づく。膨大な情報に呑み込まれるのではなく、抽斗のような新しい発想の図書館と同じように、自分からも情報発信。そのためにホームページ(http://www.page.sannet.ne.jp/h_nishi/)を開設した。受講生の利用も多い。

西村家の蔵のあり方も、きっと10代目でずいぶん変わることになるだろう。